

建設ケースメソッドのための  
講師の手引き(案)

平成 29 年 5 月

公益社団法人 土木学会  
建設マネジメント委員会  
建設ケースメソッド普及小委員会

## はじめに

「建設ケースメソッド」は、受講者が実際にあった「ケース」で描かれる「修羅場」を「主人公」になりきって疑似体験することにより、建設マネジメント力の向上を図る教育システムです。本手引きは、「建設ケースメソッド」を用いて授業を行う講師の方を対象に、事前準備や授業の進め方について、その基本や留意事項をまとめたものです。

講師は授業で使用するケースの当事者ではありませんが、ケースが扱う分野に精通し、かつ建設マネジメントの経験が豊富な者が講師を務めることを想定しています。

ケースメソッドでは講師の役割が極めて重要です。ケースメソッドの特性や使用するケースの内容を十分に理解の上、授業のねらいや受講者に伝えたいことを定め、授業の準備を行い、討議をリードする必要があります。

定型化した授業の進め方はありません。本手引きを参考にしつつ、講師自身の経験や知識を活用し、授業の効果がより高まるよう創意工夫を加えて下さい。

## 目 次

	ページ
1. ケースの選定	・・・ 1
2. 講師の役割	・・・ 1
3. 事前準備	・・・ 2
4. 授業の進め方	・・・ 5
5. 留意点	・・・ 7

### 【参考資料】

参考1：事前配付資料の例	・・・ 9
参考2：教案、事前設問、板書の例	・・・ 11
参考3：事後アンケートの例	・・・ 15

---

### 【参考文献】

JOHN S. HAMMOND；ケースメソッドによる学習、日本ケースセンター資料

## 1. ケースの選定

研修実施主体に研修の目的を確認し、受講者の属性を踏まえ、教育目的に合致するようなケースを選定します。

※土木学会建設マネジメント委員会では、災害対応マネジメント力の育成を目的としたケースメソッド用教材（ケース）を11ケース作成し、土木学会のホームページ上で公開しています。

<http://committees.jsce.or.jp/cmc/>

## 2. 講師の役割

ケースメソッドは、現実に生じる各種の問題に対し、対応力、思考力、判断力等を養う手法として、ビジネスの世界には広く取り入れられている手法です。現実に起こった事例をもとに作成された「ケース」を教材にして、自らがその局面に身を置いたとすればどのように対処したかを真剣に考え（疑似体験）、グループ討議、全体討議等を通じて考えを深め、そして新たな気づきが生まれるといった手法です。

ケースメソッドにおける講師の最も重要な役割は、受講生が最終的に何らかの「気づき」が得られるように導くことです。この点において、「知識を教える」授業とは大きく異なります。

※サポート・スタッフについて

ケースメソッドにおける講師は、上記の役割を果たして授業の効果を高めるために授業全体をコントロールする立場にあり、必ずしも授業で取り上げるケースの専門家であるとは限りません。その場合には、専門家（ケースに類似する業務等の経験者）に加わってもらい、グループ討議、全体討議やまとめの段階で講師の求めに応じて状況説明やコメント、アドバイスをしてもらうという方法も考えられます。

講師はサポート・スタッフの導入の検討も含めて、授業全体の進め方を決める必要があります。

## 3. 事前準備

### 3. 1 講師としての事前準備

#### (1) 情報収集

ケースを十分に読み込んで、ケースの背景や内容及びケースライターの意図などを理解するとともに、関連する情報を参考文献等から収集します。収集した情報は、講師としての発言に厚みを加えるとともに、必要に応じて受講者に提供することにより、臨場感を高めたり、討議を活性化させるのに役立てましょう。

#### (2) 学習目標、授業の到達点の設定

研修の目的や受講者の属性を踏まえ、学習の目標を立て、さらに授業終了時の到達点を設定します。

#### (3) 主たる討議課題の設定と事前設問の作成

上記(2)を達成するに相応しい討議課題(グループ討議や全体討議で受講者に問いかける主たる質問)を設定します。ケースに描かれている問題の本質や、「ケースに登場する主人公に自分を置き換えて、自分ならどうするだろうか」といったことを受講者に考えさせるような質問がよいでしょう。

その中から、事前設問を数問選びます。なお、ケースによっては事前設問の例も用意されていますので、参考にして下さい。

※ P14 参考2-②「事前設問の例」

#### (4) ケースと事前設問の配布

授業の2～3週間前にケースと事前設問を配布し、ケースの熟読と事前設問に対する回答を期限までに提出することを受講者に求めます。

予習を促すことは、受講者が自ら考え、限られた授業時間内で効率的かつ活発な討議を行う上で重要なプロセスです。

なお、多くの受講者はケースメソッドという手法を知らないことが想定されますので、ケースと事前設問を配布する際に、「ケースメソッド」についての説明、事前準備(予習)の重要性、討議への積極的参加の重要性を記した資料を合わせて配布しておくことが望まれます。

※ P9 参考1「事前配布資料の例」

#### (5) 事前設問に対する回答の分析

事前設問に対する受講者からの回答を分析し、事前準備の程度や経験・知識のばらつきなど受講者の傾向をおおよそ把握しておきます。

## (6) 教案（授業計画）の作成

以上を踏まえ、3. に示す基本的な授業の進め方を参考にして、授業のプログラムを決めます。

各プログラムの中で、講師として受講生にどのような質問をし、どのような討議を行い、何を伝えたいかを決めておくことが重要であり、これを踏まえて時間配分を決め、その結果を教案（授業計画）という形にまとめます。

※ P11 参考2-①「教案の例」

## (7) 板書計画の作成

板書は、4. 1に述べる「②共通認識の醸成」「④全体討議」「⑤まとめ」などにおいて、受講生から出された意見やキーワード等をホワイトボードに書き留め、その後の議論に活かすもので、ケースメソッドでは重要な役割を担います。

講師は、どのような討議になるのかをあらかじめ想定し、板書の方針やレイアウトを検討しておきますが、受講生の発言に応じて柔軟に板書を行うことも必要です。

なお、講師自ら板書することが基本ですが、板書する時間を節約し効率よく授業を進めるためには、別に板書係を置くこともあります。この場合には、講師は授業の進め方や講師の意図をあらかじめ板書係に十分に伝え、板書計画について共通の認識を持つことが重要です。

※ P14 参考2-③「板書の例」

## (8) 教室のレイアウト、グループ分け、

3. 1に述べる方法で授業を行うための教室のレイアウトをあらかじめ決めておき、授業当日には速やかに机等の配置ができるようにします。

グループ討議を行う場合には、あらかじめグループ編成（通常は5～6人のグループがよい）を決めておきます。受講生の属性（組織、役職、年齢等）を勘案して、可能であれば属性が偏らないようなグループ編成がよいでしょう。グループ討議の際の机のレイアウトを決め、それ以外のプログラムの時に机の配置を変えるかどうかの計画も必要です。

教室の広さ、受講者の人数を確認した上で、講師の立ち位置、説明用に映像を使用する場合の資機材やホワイトボードの位置を決めます。その際、

- ① 映像を映すスクリーンやホワイトボードが受講生全員から見やすい位置にあること
  - ② 講師の声が受講生全員に聞き取れるよう、講師の立ち位置と受講者の配置をきめること
- が重要です。



グループ討議の実施例



全体討議の実施例

- (9) 授業に用いる資料・写真・映像・資機材・名札・ホワイトボード・時計等の準備  
配布されたケース以外に、討議に役立つ資料・写真・映像と必要な機材を準備します。

討議では受講者を固有名詞で呼ぶことで発言しやすくなることから、名札・座席表を準備しておくといよいでしょう。

上記(7)で検討した板書計画に基づいて、ホワイトボードの台数や配置を決めておきます。

グループ討議は時間を限って行いますので、受講者が討議しながら時間が認識できるよう時計や時間表示があると望ましいでしょう。

### 3. 2 受講者の事前準備（予習）

ケースメソッドの授業では、事前に受講者に「ケース」が配布されます。受講者は、ケースに描かれた問題の本質を読み込んで授業に臨みます。

予習に際しては、「ケースに描かれている問題の本質は何だろう」「ケースに登場する人物の立場に自分を置き換えて、自分ならどうするだろうか」といったことを自問しながらケースを読み、用意された事前設問に対する回答を作成し、期限までに提出します。

## 4. 授業の進め方

### 4. 1 授業の組み立て

#### ①オリエンテーション

- ・ 授業の進め方、時間の割り振りなどを受講者に説明します。

#### ②共通認識の醸成、ケースの補足

- ・ 受講者は予習をし、事前設問に回答していることを前提としますので、講師がケースの内容を説明することは原則として行いません。
- ・ ただし、受講者の属性のばらつき等に起因して、ケースの背景や登場人物などについて共通認識を持った方が討議しやすいと判断される場合には、受講者が最低限の共通認識を持てるような説明を加えます。
- ・ この場合、後の討議が活性化するように、質問形式で行い、発言しやすい雰囲気を醸成するのがいいでしょう。
- ・ 受講者は紙面上で予習はしているものの、さらに臨場感を加え、討議を活性化させるために、写真・映像などを活用することも有効です。

#### ③グループ討議

- ・ 事前設問に対する各受講者の考えを少人数（5～6人）のグループ内で発表し合います。講師は討議に参加しませんので、討議を活性化するためにグループ内で進行役を置くことも考えられます。
- ・ 自ら発表し、他者の意見を聞くことで、自分の意見を修正したり補強したりすることが目的であり、グループで意見をまとめることを目的とするものではありません。
- ・ 自らの意見・考えを整理し、次の全体討議で発言できるよう備えます。

#### ④全体討議

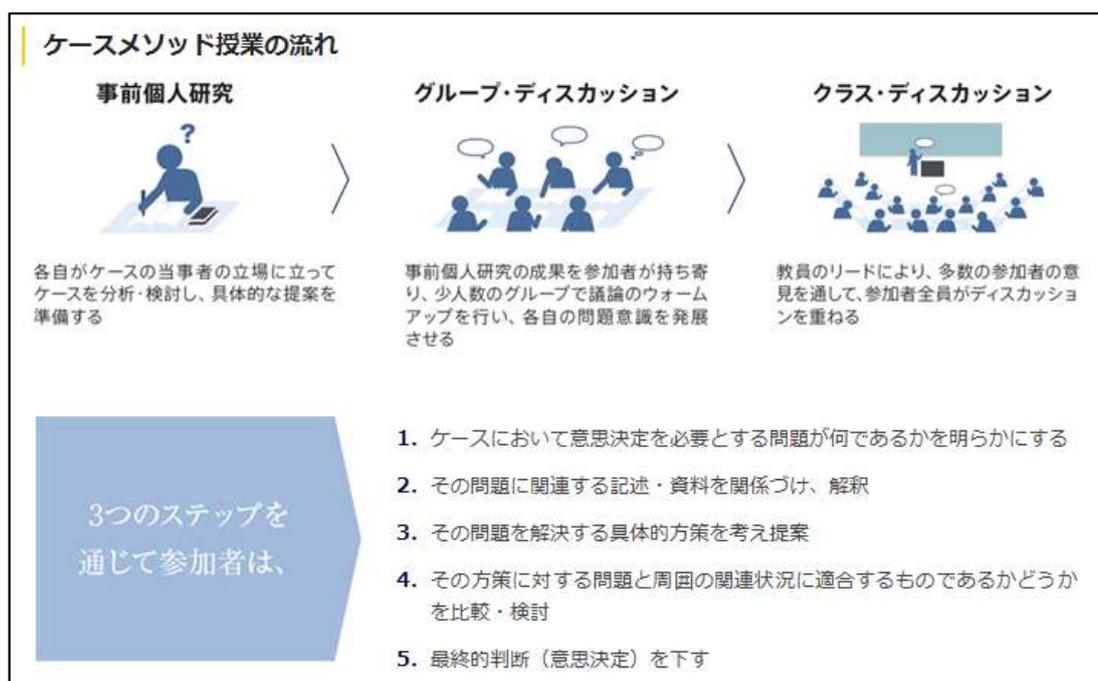
- ・ 講師のリードの下で、全員で討議を行います。
- ・ 講師はあらかじめ質問を用意しておくとともに、受講者の発言を促します。
- ・ 「あなたはどうか考えるのか？」という質問とともに、「なぜそのように考えるのか」「そうするためにはどのような課題を解決すればいいのか」といった質問をして、議論を深めていきます。また、反論を求めるという手法もあります。
- ・ 受講者の意見を否定するのではなく、多様な意見が出るように仕向けます。
- ・ 意見のキーワードを板書し、議論の流れや論点を明示します。

#### ⑤まとめ

- ・ 討議の内容をまとめ、ケースに内在し、もしくは討議で明らかになった有益な教訓や新たな見解などを整理します。
- ・ 講師自身の経験などを交えて、このケースから学ぶべきことや、マネジメント力の重要性などを受講者に伝えます。

### ※創意工夫

- ・ 上記①～⑤が基本的な流れですが、受講者が積極的に討議に参加できるよう、また、全員が興味深く（あるいは楽しく）授業に参加できるよう、講師は創意工夫に務める必要があります。
- ・ ケースに登場する人物に受講者が扮してロールプレイを行い、それぞれの立場からの見方を出し合うのも、臨場感を高めるのに有効な手法の一つです。



Keio Business School HP 「慶応型ケースメソッド」より抜粋

注) 図中の「事前個人研究」「グループ・ディスカッション」「クラス・ディスカッション」を、本手引きでは「事前準備」「グループ討議」「全体討議」と記述しています。

#### 4. 2 教案（授業計画）

上記を踏まえた教案を作成しておきます。およその時間の割り振り、質問事項などを考え、タイムスケジュールの形式で作成しておくのがよいでしょう。

※ **P12 参考2-①「教案の例」**

## 5. 留意点

### 5. 1 授業を進める際の留意点

- (1) 講師は、あらかじめ準備した教案（授業計画）に沿って授業を進めますが、場合によっては計画通りに進まないことがあります。討議の流れに応じて臨機応変に修正しながら的確に授業を運営することが大切です。
- (2) ケースメソッドの基本は、受講者が積極的に討議することです。その際の講師の役割は、
  - ① 質問を投げかける。
  - ② 発言を促す。
  - ③ 論点を整理する。あるいは明確にする。

ことによって、討議の手助けをすることです。また、討議が脇道にそれないような進行に心掛けます。

質問を投げかけた後、即座に発言が無くても20秒程度は待つという姿勢も必要です。それでも発言がでない場合は、質問を変えたり、発言者を指名するなどの臨機の対応も必要です。

- (3) 論点をわかりやすくするために、受講者の発言のキーワードを板書します。その際には、内容に応じて分類したり、相反する意見を対比させるなど、板書の方針やレイアウトなどをあらかじめ考えておくことが必要です。
- (4) 討議中に講師が自らの意見を述べることは極力控えます。また、受講者の意見を一定の方向まとめることも行いません。受講者が自らの考えを整理して発言し、討議を通して新たな見解や気づきが得られるよう仕向けることが大切です。
- (5) 授業の終わりには、講師は討議の内容をまとめ、ケースに内在し、もしくは討議で明らかになった有益な教訓や新たな見解などを整理します。また、講師自身の経験などを交えて、このケースから学ぶべきことや、マネジメント力の重要性などを受講者に伝えます。

### 5. 2 設問の回答およびケースの結末について

- (1) 授業の終わりに「設問の答えは何ですか？」と受講生に尋ねられることがありますが、ケースメソッドによる学習は一つの答えを提示するものではありません。ケースメソッドの特徴は、「正解を求め学ぶ学習」ではなく、「自らが判断する力を育む学習」であるという点にあります。
- (2) 講師がケースの結末を知っている場合に、授業の最終盤で受講者に説明することもあります。実際に行われたことが正解というわけでもありません。ケースメソッドは「ケースの検証ではない」という点を受講者に理解してもらう必要があります。
- (3) ケースメソッドで大切なことは、受講者が主人公となって疑似体験することで

- ① もし自分がその状況にいればどうしたかを考えること
- ② なぜそうするのかを考えること
- ③ 結論を導くための能力を高めること

です。授業の中でこの意識を高めるよう、講師は留意する必要があります。

### 5. 3 事後アンケート

授業後に、授業の効果を把握するとともに、講師として次の授業をより良いものとするための参考として、アンケートを行うとよいでしょう。ケース（教材）、授業の進め方、授業の効果などについて受講者の意見・感想を聞きます。

※ P15 参考3 「事後アンケートの例」

## 【参考資料】

### 参考 1 : 事前配付資料の例

土木学会建設マネジメント委員会で作成した 11 ケースのうち、ケース 2 「大津波警報下での通行止めと道路啓開 ー地方整備局出張所の決断と行動ー」を用いて、災害対応マネジメント演習を行った際に、受講者に事前配布した資料の例を以下に示します。

平成 年 月 日

受講者の皆様へ

講師：〇〇 〇〇

#### 災害対応マネジメント演習について

##### 1. 「ケースメソッド」とは

災害対応では日頃からの十分な「事前の準備」が必要ですが、特に大規模な災害における初動では「臨機の対応」が求められ、対応する組織や個人の判断や行動は、ルールやマニュアル通りにはいかない、あるいはそれらを超えた対応が求められる状況も生じます。

このとき発揮される「災害対応マネジメント力」は「災害発生の初動時においてインフラ施設管理者、建設企業等の組織とその職員が適切な対応を行うために必要とされる、状況認識、対応策の選択・判断その実施の決断、そして組織内外の力を動員してそれを実現する力などの総合的な力」であり、これを広く育成していく必要があります。

災害対応に必要な専門知識やスキルは、教科書やマニュアル書等によって習得可能ですが、それらの知識等をベースにして発揮される災害対応マネジメント力については、文字では伝達されにくく、実戦での修羅場を経験しなくては養われにくいものです。しかし、実践で修羅場を経験する機会は極めてまれであるため、それに代わるものとして今回用いるのが「ケースメソッド」という授業手法です。

(次ページにつづく)

## 2. 事前準備（予習）

ケースメソッドの授業では、各自が事前準備をきちんとしておくことが重要です。事前に受講者に「ケース」が配布されます。受講者は、そこに描かれた災害の様相や、登場人物が判断に悩み苦しんだ修羅場を読み込んで授業に臨んで下さい。（授業ではケースの詳細な説明は行いません。）

予習に際しては、ケースに登場する人物の立場に自分を置き換えて、「問題の本質は何だろう」「自分ならどうするだろうか」といった自問をしながらケースを読んで下さい。そして、別添の事前設問に対する回答をまとめて下さい。

## 3. ケースメソッドの特徴

講師の誘導に従って、皆さんで討議をしていただきます。受講者は授業での討議等を通じて、ケースに描かれた災害や、修羅場での主人公の決断や行動を自らの疑似体験とすることにより、災害対応マネジメント力を培います。

実際に行われた災害対応事例を学ぶのが目的ではありません。大切なことは、

- ✓ もし自分がその状況にいればどうしたか
- ✓ なぜそうするのか

を考えることです。

ケースメソッドの特徴は、「正解を求め学ぶ学習」ではなく、「自らが判断する力を育む学習」であるという点にあります。

## 4. 演習にあたって

積極的に討議に参加して下さい。自分の意見を述べるとともに、他の人の意見を聞き、場合によっては反論しましょう。発言し、意見を戦わせることから学習するのが「ケースメソッド」です。

(以上)

## **参考2：ケース2の教案、事前設問、板書の例**

土木学会建設マネジメント委員会で作成した11ケースのうち、ケース2「大津波警報下での通行止めと道路啓開 ―地方整備局出張所の決断と行動―」を用いた授業の教案および事前設問の例を参考として示します。

### **参考2－①：教案の例**

## **災害対応マネジメント演習**

### **大津波警報下での通行止めと道路啓開**

#### **―地方整備局出張所の決断と行動―**

#### **ケースの概要**

地方整備局の出張所は、道路や河川など国土交通省所管施設の日常の管理を担当している。しかし災害が発生したときには、現場に直結した最前線基地となり、臨機の対応が求められる。特に大規模災害時には、地方整備局本局や事務所との交信が途絶え、出張所長が自らの判断で対応しなければならない状況や、時には職員や作業員の生命の危険を伴うような決断も迫られることになる。本編はその具体事例として、東日本大震災において東北地方整備局三陸国道事務所宮古維持出張所が実施した通行止めと道路啓開をケースとして取りあげ、その場の指揮官である出張所長の疑似体験を通じて災害対応マネジメント力の涵養を図るものである。

#### **学習目標**

非常時における現場最前線での対応のため、時には職員や作業員の生命の危険を伴う場合であっても必要な行動を取る決断力、マネジメント力を体得させることを目標とする。

#### **授業の到達点（受講者に何を気付かせるか）**

- ① 災害対応マネジメントには「日頃の備え」と「臨機の判断」が求められること。
- ② リーダーには、状況把握力・判断力、修羅場での決断力、周囲への説得力、実行する為の対応策構築力が必要であること。
- ③ このような大災害が起こったとき、道路管理者及びその関係者は何を考えなければならないのか？ このケースの本質は何か？ 何が大事なのか？ マネジメント力とは？

## 教案

時間	項目	内容・設問等
<u>13:15</u>	講師自己紹介 オリエンテーション (5分)	① 積極的な発言、討議への参加の促し。講師の役割 ② グループ討議、全体討議、ロールプレイを予定している ③ 津波の <b>映像</b> を見ながら、気持ちを高揚させる
13:20	導入(15分) 共通認識の醸成、 通行止めを題材に発言しやすい雰囲気づくり	① 宮古市とはどんな所? <b>写真・地図</b> を見ながら、道路の概況を説明。出張所とは? ② <b>写真</b> を見ながら、通行止めについて共通認識を持つ ③ 通行止めの改善点、今回うまくいった点
13:35	修羅場1、設問1. についてのグループ討議(15分) 受入れ派 vs. 受入れない派	受入れ派 vs. 受入れない派に分かれて討議 なぜそのように考えるのかを各自発表 判断要素、リスクや責任の分析につなげる
13:50	設問1. についての全体討議 (15分)	あなたが出張所長の立場であったなら、ドライバー等の庁舎への受け入れについてどのような判断を下したでしょうか。 ① 各自が出張所長になったつもりで、設問の回答を発表 ② 鈴木・葛藤、判断要素、リスクや責任の分析
14:05	修羅場2. 道路啓開についての共通認識の醸成(10分)	道路啓開について <b>映像・写真・地図</b> を用いて共通認識を持つ。 (あるいは想像する)
14:15	修羅場2 についての共通認識の醸成、ロールプレイの説明 (10分)	① ケースの記述を時系列で再確認 ② ロールプレイの進め方の説明、役作り、役者選出依頼
14:25	修羅場2. についてのグループ討議(15分)	役作り、セリフの検討、役者選出
<u>14:40</u>	休憩(10分)	机の並び替え
<u>14:50</u>	ロールプレイ(全体で) (30分)	事務所長、出張所長、代理人(2名)の合計4人がそれぞれの立場に立って道路啓開の問題点・解決策を議論 事務所長: 使命感。道路啓開の緊急性と周辺状況を認識。 出張所長: 道路啓開の必要性は理解するも、責任者として安全性にも配慮すべき立場 代理人: 危険がある中で実際に作業を行う立場。 ・ 他の受講生には、それぞれの役者の不足する部分の補完意見を求める。また、市長、被災者、地方整備局長、社長、作業員、警察・警察などの立場での考察・意見を求める ・ ポイントとなる場面では適宜講師が質問を投げかける

15:20	設問 2. についての全体討議 (30分)	<p>あなたが出張所長の立場であったなら、大津波警報下での道路啓開の実施についてどのような判断を下したでしょうか。</p> <p>① 各自が出張所長になったつもりで、設問の回答を発表</p> <p>② 鈴木、葛藤、判断要素、リスクや責任の分析</p>
15:50 <u>16:15</u>	授業全体のまとめ (25分)	<p>ケースメソッドのポイント</p> <p>設問 3.</p> <p>最終設問</p> <p>授業を通じて何に気付いたか</p> <p>講師からのメッセージ</p> <p>アンケートのお願い</p>

**参考 2 - ② : 事前設問の例**

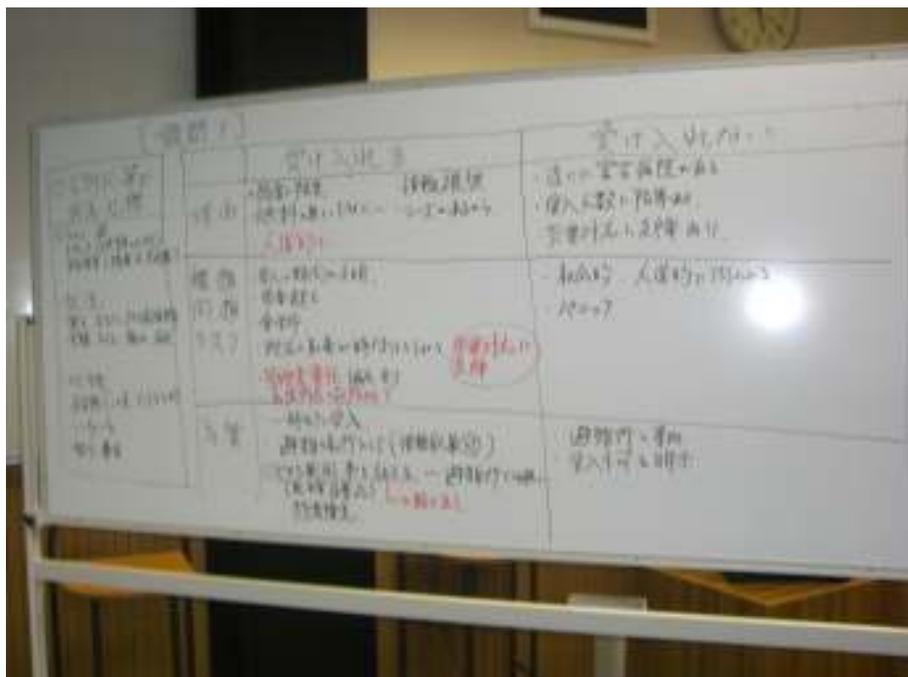
設問 1.

あなたが出張所長の立場であったなら、ドライバー等の庁舎への受け入れについてどのような判断を下したでしょうか。なぜそのように考えましたか。

設問 2.

あなたが出張所長の立場であったなら、大津波警報下での道路啓開の実施についてどのような決断を下したでしょうか。なぜそのように考えましたか。

**参考 2 - ③ : 板書の例**



## 参考3：事後アンケートの例

### ケースメソッド授業を受講された皆様へのアンケート調査票

土木学会建設マネジメント委員会

建設ケースメソッド普及小委員会

ケースメソッドを建設分野で普及するにあたって、今後の参考にさせていただきたく、アンケートへのご協力をお願いします。

#### A ケース（教材）について

問1 今回のケース（教材）を事前に読まれた際の感想をお答えください。

- ① よく理解できた ② おおむね理解できた ③ 理解しにくいところがあった ④ほとんど理解できなかった

問2 上の問で③または④と答えた方に対して、その理由をお尋ねします。（複数選択可）

- ① テーマに関心がないから ②用語が難しすぎたから ③ケースの中の状況説明等の記載が十分でなかったから  
④ その他（自由回答：\_\_\_\_\_）

問3 ケース（教材）に対する事前設問についての感想をお答えください。（複数選択可）

- ① 回答は難しくなかった ② 設問の意味が良く分からなかった ③設問は理解できたが内容が難しすぎた  
④ ケースの予習に役立った ⑤ 授業での討議に役立った ⑥ 授業にはあまり活かされなかった

#### B 授業（グループ討議、全体討議）について

問4 あなたは、グループ討議、全体討議の場で積極的に発言できましたか

- ① 多く発言できた ② かなり発言できた ③ あまり発言できなかった ④ほとんど発言できなかった

問5 受講者数や授業時間についてどう思われましたか

- <全体受講者数> ① もっと少ない方がいい ② 適正規模だった ③もっと多い方がいい  
<グループ討議数> ① もっと少ない方がいい ② 適正規模だった ③もっと多い方がいい  
<全体討議の時間> ① もっと短くてもいい ② 適正時間だった ③時間が足りなかった  
<グループ討議時間> ① もっと短くてもいい ② 適正時間だった ③時間が足りなかった

問6 教室の授業環境はいかがでしたか。（複数選択可）

- ① 快適、良好だった ② 周りのグループの声が大きくグループ討議に支障をきたした ③ 教室が狭すぎた  
④ 講師の声が聞き取りにくかった ⑤ 受講生の発言が聞き取りにくかった ⑥ 講師の板書が見づらかった  
⑥ その他（自由回答：\_\_\_\_\_）

問7 授業の進行、講師の問いかけ等についての感想をお答えください。(複数回答可)

- ① よく工夫された授業だった
- ② 設問の展開が理解しにくかった
- ③ 講師の説明や言葉遣いが難しかった
- ④ もう少し一つのテーマをじっくり議論したかった
- ⑤ もっとさまざまな設問をして欲しかった
- ⑥ その他(自由回答; \_\_\_\_\_)

問8 ロールプレイの手法についての感想をお答えください(ロールプレイが用いられた授業の場合のみお答えください。)

- ① ロールプレイは有効
  - ② どちらともいえない
  - ③ あまり有効ではない
- 具体的コメントがあれば記述を(\_\_\_\_\_)

### C ケースメソッドの効果について

問9 今回のケースメソッドの授業は疑似体験の形成に役に立ったでしょうか。

- ① 今後に活かせる疑似体験できた
- ② ぼんやりとはあるが疑似体験ができた
- ③ 疑似体験とまではいかないが参考になる議論だった
- ④ 今後あまり活かされるとは思わない

問10 ケースメソッドの授業によって何かしら「気付き」はあったでしょうか。

- ① 大いにあった
- ② まあまああった
- ③ 少しあった
- ④ 全くなかった

問11 ケースメソッド手法は、災害対応力の育成に有効と思いますか。

- ① 有効だと思う
- ② やや有効だと思う
- ③ あまり向いていないと思う
- ④ 向いていないと思う

問12 震災以外にどのような災害のケース(教材)があれば良いと思いますか。

自由回答:

問13 ケースメソッドは、災害対応の分野の他にどのような建設分野に活用できると思いますか。

自由回答:

問14 その他(自由に意見をご記入ください。)

※ご協力、ありがとうございました。

初 版 : 平成 28 年 9 月 28 日